
緋弾のエリア ～教授に教わし者～

百座

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア ～教授に教わし者～

【Nコード】

N2281Z

【作者名】

百座

【あらすじ】

1年の時 とある事情でロンドン武偵高にクエストに行っていた俺、日野悠治は2年の始業式の際に東京武偵高に帰ってきた。

俺はその日神崎・H・アリアと出会う。

その日から俺が追い続けている事件は進展する。神崎・H・アリアと緋緋色金によって・・・

そして俺は教授からあるクエストを言い渡される

「守ってもらえるかな？ 神崎・H・アリアを・・・」

1年ぶりの武偵高

「おい、ボウズついたぞ武偵高だ」

「ふああ・・・」

船の甲板そこに備え付けられたベンチから俺、日野悠治ひのゆうじは体を起す。

うん、いい天気だ雲ひとつない。

「もつついたの早いねおじさん」

「もつつてお前2日ぐらい寝てたぞ！」

「そうだっけ？」

俺は背伸びをしながら船の先端の方まで歩いていく。そこから見えるのは人口浮島。

かれこれ1年ぶりか・・・みんな元気かな？

「おじさん、ありがとね」

俺は久しぶりに会うみんなに少しときどきしながら船を下りた。

2

船から下りて歩くこと数分

目の前には大きな建造物がみえてきた。武偵高だ。

東京武偵高校、ここは近代凶悪化する犯罪に対抗するために新しく作られた国際資格、『武偵』を育成するための教育機関である。

『武偵』とは簡単に言うと武装を許された探偵で警察にいた活動ができるもののことを言う。警察と違い『武偵』は金で動く、金さえ払えば武偵方の許す限りならなんでもこなす便利屋と考えてもらってもよい。

校舎に入った俺は教務科マスタースに書類を持って行き自分の教室に向かう。俺はどうやら2-Aらしい。

教室の扉の前に立った俺は深呼吸をする。やっぱり1年もあってな

いと緊張するなあ。

ガラガラ、と扉を開け中に入る。

丁度ホームルームの途中だったようで先生が『ロンドン武偵高にクエストに行つてた悠治くんが帰つてきましたよー』と軽くみんなに報告する。

「おう！ 悠治！ お前は絶対帰つてくると思つてたぞ！ さあ、ここで一秒でも早く死んでくれ！」

「悠治い！ やつと死にに帰つてきやがったか！ お前みたいな間抜けはすぐ死ねるぞ！」

と声をかけてきたのはアサルトの夏海と村上だ。

「お前からここでコンマ一秒でもはやく爆死しろ！」
俺が二人に向けて言い返す。

これは別に怒つて言っているわけではない。

『アサルト』 通称 明日無き学科

この学科の卒業時の生存率は97.1%とされている。つまり1000人生徒がいたとしてそのうち3人は無事卒業できないのである。クエスト中に命を落としたり、訓練中に命を落としたりと理由はさまざまだが危険な学科である。もちろん毎年そういうわけではない、全員卒業できた年だってあるらしいな。そんな危険な学科アサルトでは『死ぬ』と言うのはおはよう、こんにちわと同じ挨拶なのだ。

俺もこんな危険でぶつ飛んだ学科に属しているわけだが・・・

「それじゃあ、悠治くんの席は・・・」

「センサー俺の隣空いてますよ」

とぶんぶん手を振っている190はあるであろうこの大男は武藤剛気。

こいつは車輛科ロツの優等生でよく俺を事件の現場に運んでくれた。

乗り物と名のつくものならバイクからロケットまで何でも操縦でき

るいわば乗り物オタクだ。
俺は武藤の隣にささっと座る。

しばらくぼーっとしていると不意に後ろの扉が開いた。

「すみません、ちょっと事情があつて遅れました」

そこから入ってきたのは遠山キンジ、俺がこっちにいたところよくパ
ーティー組んでたやつだ。

俺がよう、キンジと声をかける前に

「あたしあいつの隣がいい」

丁度キンジが入ってくる少し前、3学期の終わりに転校してきた神
崎・H・アリアの紹介があつた。

その終わり際に入ってきたキンジにアリアは告げた。

アリア・・・どこかで聞いたような聞かないような・・・まあいい
か。

そんなことよりアリアの『あいつの隣がいい』でクラスは大盛り上
がりだ。

「な、なんでだよ」

キンジが頭を抱える。

ここはそつと見守つとくとするか。

「よ、よかつたなキンジ、なんか知らんがお前にも春が来たみただ
ぞ。 センサー俺転校生さんに席譲りまーす！」

武藤がささつと席を移動するとそこに来たアリアはキンジの方を向き
「キンジこれさっきのベルト」

とベルトを投げ渡した。 キンジ、ベルトを貸すなんてお前一体何
したんだ？ 半ばおびえているように見えるキンジに俺の疑問は膨
らむ。

そこにその推理をしてくれるものが現れた。

「理子分かった！ 分かつちゃった！ これフラグばつきばきにたつてるよ！」

キンジの左に座っていた峰理子が がたん、と勢いよく席を立つ。

「キー君ベルトしてない！ そしてそのベルトをツインテールさんが持つてきた！ これ謎でしょ？ 謎でしょ？ でも理子には推理できた！ できちゃった！」

大体アリアと同じぐらいの小柄なこの子は探偵科インクスタのおばかさんだ。制服もゴスロリ風に魔改造してある。

「キー君は彼女の前でベルトを取るなんらかの行為をした！ そして、彼女の部屋にベルトを忘れてきた。つまり二人は熱い熱い恋愛の真つ最中なんだよ！」

理子は髪をぴよんぴよんさせながらおばか推理をぶちまける。

普通の人が聞いてもそこまで信用はしないだろう。しかしここは馬鹿の吹き溜まり武偵高。

クラスは大盛り上がり盛りに上がる。

「き、キンジがこんな可愛い子といつ間に」「影の薄い奴だと思つてたのに」「フケツ」

などなどさまざま言葉が飛び交い、だんだんヒートアップしていく中

ダダダン・・・

アリアが銃をぶつ放したのだ。アリアの持つ漆黒のガバメントから打ち出された45ACP弾が壁に大きな穴を開ける。クラスはしーんと静まり返り、理子はペタンと座り込んでしまった。

なぜ教室で発砲しても誰も止めないのか。それはここ武偵高では射撃場以外での発砲は『必要以上にしないこと』となっている。

つまりやつてもいい。俺達は日常茶飯事のように銃撃戦が行われる武偵なるうというものだから、どこぞの軍隊並に感覚を麻痺させる必要がある。

だが・・・おそらく自己紹介で発砲したのはこいつが初めてだろう。

「れ、恋愛なんてくだらない！」

少し俯き顔を赤くしたアリアは言い放つ。カランカラン、拳銃から排出された空薬莖が床に落ちて静けさが増す。

「全員覚えておきなさい！ そんな馬鹿なこと言う奴には・・・」
後に何百回何千回と聴かされることになるのである。その言葉をアリアは言い放つ。

「風穴開けるわよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2281z/>

緋弾のエリア ~教授に教わし者~

2011年12月8日03時06分発行